

埼玉県飯能市

# 下名栗諏訪神社の獅子舞

揃い・例大祭（8月25日に近い土・日）

番組と予定時刻（変更の場合あり）

- |                   |             |
|-------------------|-------------|
| (1) 御宮参り・御幣懸り     | 9:00～10:10  |
| (2) 花懸り           | 10:35～11:05 |
| (3) 三拍子           | 11:30～12:00 |
| … 神事式（例大祭・雅楽奉奏） … |             |
| (4) 棹懸り           | 13:00～14:10 |
| (5) 女獅子隠し         | 14:35～16:35 |
| (6) 白刃            | 17:00～18:20 |

## 目次

1 諏訪神社の祭礼と獅子舞	1
2 芝（演目）の構成	3
3 内容と見どころ	6
(1) 御宮参り・御幣懸り	6
(2) 花懸り	7
(3) 三拍子	8
(4) 棹懸り	9
(5) 女獅子隠し	9
(6) 白刃	11
4 三匹獅子舞と下名栗の獅子舞	13
5 獅子舞の継承者とその組織	17
【引用参考史料・文献・ウェブサイト】	23

## 1 諏訪神社の祭礼と獅子舞

**氏子と祭礼** お盆も終わり、ツクツクボウシが秋をつげるころ、「中西のお祭」がやってきます。下名栗字中西のお諏訪さま、諏訪神社は、埼玉県飯能市大字下名栗地区（旧武蔵国秩父郡下名栗村）の守り神である鎮守です。諏訪神社を共同で祀る氏子は、もともとはこの地区に住むすべての家でしたが、現在では氏子会費を納める家の家族からなっています。諏訪神社の祭礼は1年間に4つ、元旦祭（1月）、祈年祭（2月）、例大祭（8月）、新嘗祭（11月）があります。獅子舞は最大の祭礼である例大祭に奉納されます。江戸時代には太陰太陽暦の7月25日でした。明治になり太陽暦が採用されてからは太陽暦の8月25日に変更されました。平成4年（1992）からは、関係者も見学者もウィークデイに休暇を取りにくい時代となったため、それに近い日曜日となりました。

祭礼は、氏子の役員によって運営されます。氏子の役員には氏子総代と祭典世話掛とが6名ずつおり、下名栗にある6つ（平成26年度〈2014〉からは5つ）の自治会地区から選出されています。そのほかに各地区2名の行事がいましたが、平成10年（1998）からこれに代って祭礼庶務を担当する祭典補助員が8名募集されるようになりました。しかし、その人数は徐々に減って平成26年度には2名にお願いすることになっています。

**獅子舞の配役** 現在の獅子舞は、青梅市成木の高水山から、30年余の伝習期間を経て天保14年（1843）に正式に伝授されて以来、現在まで休むことなく伝えられています。その配役は、太鼓（杵なしの締め太鼓）を腹につけた大太夫（金）・女獅子（赤）・小太夫（黒）の3匹の獅子を担当する獅子舞役者、4つのスリザサラを担当するササラスリ（ササラッコと呼ばれる、以下ササラ）、笛（篠笛・七孔四本調子）を担当する笛方（囃子方）、謡を担当する謡方からなります。獅子は通常「狂う」と言われるほど舞い方が激しく、成年男子が担当します。獅子頭の重さは、女獅子1.9kg、小太夫2.0kg、大太夫2.5kgです。ササラは小学2年生以上の女子が務めます。平成26年度（2014）からは男子にも依頼するようになりました。ササラの花笠には日・月の造り物と2つの牡丹がつきます。このササラの着付けには、氏子の女性3～4名をお願いしています。笛方は成年男子が担当してきましたが、現在では小学6年生以上ならば、男女を問わず参加できます。謡方は獅子・笛方のベテランがあたります。なお、「御宮参り」には指導者級の保存会員の務める猿田彦命（天狗）、「白刃」にはベテランの獅子舞役者が行う2名の太刀遣い、各芝（演目）には状況に応じてホウイ（はいおい、道化）が露払いとして登場します。太刀

の重さは800g、<sup>さや</sup>鞘とあわせると1040gです。

**練習と準備** 獅子の練習は、遅くとも4月からは定期的に行い、7月になると回数を増やし、初心者も8月に入るまでには基本を会得しておきます。笛方は春に始まり、8月からは獅子と合同の練習となります。

例大祭の準備は、7月末、稽古始めの約1週間前の道具調べから始まります。氏子総代、祭典世話掛、獅子舞保存会役員がこれにあたり、獅子舞・例大祭用の諸道具を確認し、例大祭までの準備について話し合います。

8月1日は稽古始めです。この日はササラを含む稽古の本格的な開始日であるとともに、氏子の代表と保存会員全員が顔を合わせ、関係者への必要事項の伝達、保存会新会員の紹介、獅子舞の役割（配役）の発表などがあります。その後の定期練習は、多くは夜間に2日ないし3日に1度設定し、2日間は昼稽古を設けます。その他の日にも適宜練習を入れていきます。

「揃い」の前日は稽古仕舞いです。獅子頭やササラの花笠を組み立て、社務所の祭壇にこれらを飾りつけます。そして稽古の仕上げをします。

**祭り当日** 揃いの日となる土曜日は、例大祭当日と同じスケジュールで芝を演じます。獅子頭や衣装を着け、本番どおりに行う公開の総稽古（ゲネプロ）にあたります。昭和57年（1982）より毎年1芝（演目）は境内から下名栗五区字馬場へ出て上演してきましたが、平成14年（2002）からはすべて境内で実施されるようになりました。

その晩にはかつては夜宮がありました。昭和30年代前半までは青年団が中心になって東京都秋川の二宮歌舞伎（現あきる野市・秋川歌舞伎）を呼び上演していましたが、30年代後半からは境内での野外映画上映会へとかわり、さらに名栗村演劇愛好会による舞踊とカラオケの上演へと移行しました。現在夜宮は実施されていません。

日曜日は例大祭です。氏子役員と保存会員は朝早くから社務所に集まり準備をし、<sup>まんどう</sup>万灯をつくります。宮司による出発の儀式の後、獅子舞の奉納が始まります。午前中3芝が演じられ、3芝目の「三拍子」が終わった後、地区の役職者が集まり庭場と拝殿で例大祭の神事式が行われます。平成11年（1999）までは「花懸り」の終了後、「三拍子」を演じている最中に進められていました。神事式には三管（<sup>しょう</sup>笙・<sup>ひちりき</sup>箏・<sup>りゅうてき</sup>龍笛）を奏する楽人が登場し、「<sup>え てんらく</sup>越天楽」・「<sup>ごじょうらくきゅう</sup>五常楽急」などの雅楽を添えます。午後にも3芝が演じられます。最後の芝の「白刃」終了後に千秋楽の謡を歌い、社務所まで戻ってきます。

例大祭の翌日に洗濯などの後片づけをして、祭りはすべて終了します。

## 2 芝（演目）の構成

すべての芝（演目）は、以下の節で構成されています。

出囃子－①渡り拍子－②揃い－③出端－④チラシ－⑤謡－⑥岡崎－⑦渡り拍子

舞の中心は④チラシで、長時間にわたります。チラシの内容は「3 内容と見どころ」で個々に詳しく解説することとして、ここでは芝全体の節の構成について主に説明しておきます。

芝の進行を統括するのは親笛です。親笛は笛方の最前列に立つ責任者で、節の代り目を笛尻を上げて合図するほか、獅子を見ながらテンポを調整します。笛方は親笛の指の動きを見てこれに合せ、さらに笛の音に獅子の太鼓とササラが合せることで全体が統一されます。親笛は獅子舞のコンサートマスターにあたる重要な役割を担います。

○出囃子 社務所（かつては獅子宿）から獅子行列が出発する合図。全芝に共通。

笛と大太鼓（長胴）で奏されます。下名栗で独自に作られました。笛と太鼓の絶妙な掛け合いによる曲で、山を渡る風が、強くまた弱く吹くように響きわたります。「チャヒーチャ、チャヒ」と鋭くおわり、渡り拍子を導きます。なお、このように笛の節回しを擬声的に言い表したものを、下名栗では笛の文句、一般には口唱歌くちしようがやジゴトといいます。

①渡り拍子 獅子の道行き。全芝に共通。

社務所から庭場までの道行きです。昭和 11 年（1936）に旧名栗第一尋常小学校（後の東小学校）の裁縫室を移築して現在の社務所ができるまでは、諏訪神社最寄りの岡部家（屋号「中西の上」）を獅子宿として、獅子行列が出発しました<sup>1)</sup>。この節からは笛、獅子の太鼓、ササラのするスリザサラによって奏されます。⑦も同じ節です。

②揃い 舞への序奏。全芝に共通。

ここからが芝の開始です。庭場に入場した獅子とササラが定位置について動きを止めると、この笛が始まります。獅子の太鼓はリズムカルになり、静から動への緊張感を高めます。3 笛みつぶえ（3 節）繰り返します。

③出端 序の舞。「御宮参り・御幣懸り」と「三拍子」は固有、他の 4 芝は共通。

---

1) 下名栗四区・故岡部敏氏からの聞き取り。岡部氏は元下名栗諏訪神社獅子舞保存会長。

午前の「花懸り」と午後の3芝に共通する出端の節「ヒャーロヒャーヒャートー」が印象的です。この笛にかわると、女獅子が向きをかえます。3笛聞いた後、獅子とササラが庭場を大きく3往復します。3往復目に、庭場の中央に獅子とササラが止り、チラシに移ります。

「御宮参り・御幣懸り」では、固有の出端「トーヒャニヒャニヒャニ」があります。「三拍子」の出端「トッピーピーヒャロ」も、この芝だけのものです。

④チラシ 中心となる舞。各芝ごとに違う。「花懸り」と「棹懸り」はほぼ共通。

芝の中核となる部分で、笛が同じ節を繰り返す中、様々な内容の舞が展開します。それぞれの内容は「3 内容と見どころ」で説明します。

⑤謡 芝の内容に即した、あるいは内容に掛けた古歌、俗謡。

謡方によって古風な謡が歌われます。歌い出しが3種類あります。一般には聞慣れない節回しですが、歌い出しがわかるようになると、一人で歌えるようになります。歌い出しの節は、謡の始めが五七五、七五、七七のどれによっているかで異なります。それは以下の通りです。

(A) 五七五 七七 (五七五 七五 七五 七七 もあり)

(B) 七五 七七 (七五 七五 七七 もあり)

(C) 七七 七七

「3 内容と見どころ」で示すそれぞれの謡には、ここで示した(A)(B)(C)の記号をつけておきます。なお、(6)白刃の2番だけは例外で、七七 七七ですが(A)の節で歌われます。また、一つの句の終りと次の句の始めとを、同じ音節を重ねて歌うことがあります。その音節は●印で示します。

謡の時、笛は休み、獅子の太鼓とササラとが静かに響きます。謡と謡との間奏には短い笛が入り、軽妙な舞が舞われます。

⑥岡崎 納めの舞。全芝に共通。

笛の口唱歌は、この岡崎だけが特殊で、江戸時代初期の流行歌「岡崎女郎衆」を借りています。他地域の獅子舞にもしばしば登場する歌です。

オーカザーキジョーロシーーー オーカザーキージョロシ

オーカザーキージョロシハ ヨイジョーロシ

オーカザーキージョロシハ ヨイジョーロシ

②の「揃い」によく似た節回しで、庭場での始めと終りを意識した構成になっています。揃いとの違いは、1笛の中に「オーカザーキ」という節まわしが4回出てくると、節の終わりの「ジョロシハ ヨイ」の部分で1音1拍ずつ刻む

ことによって、納めの舞らしい安定感をかもしだしている点にあります。

岡崎の舞は、3匹の獅子が4つの固定したササラの周囲を廻りながら舞います。獅子とササラから構成される三匹獅子舞の納めにふさわしく、統一性の中に、躍動感、即興性を折り込み、みごとなエンディングを演出します。最後は3匹の獅子がそろい、ササラとともに3笛で庭場の下手（鳥居側）までゆっくりと下がり、舞が終了します。

⑦渡り拍子 ①におなじ。獅子の道行き。全芝に共通。

庭場から社務所までの道行きです。

### 3 内容と見どころ

#### (1) 御宮参り・御幣懸り

「御宮参り」は、獅子行列が社殿をまわりながら参拝します。これにつづく「御幣懸り」は、初め女獅子が庭場に何か光る物が落ちていているのを見つけ、怪しみ恐れます。次に小太夫が恐る恐る近寄って、それが金色の御幣であることを確認すると、3匹は次第に複雑に絡み合い、最後に大太夫が悪魔退散の祈願をする、という内容です。女獅子をリード役として3匹が織りなす構成美は、数ある三匹獅子舞の中に比類のものがなく、その極致を示す舞となっています。

#### ○御宮参り

最初に関係者全員が社務所に集まります。獅子、ササラスリ、太刀遣い、猿田彦（テング）が前に並び、宮司による出発の儀式が執り行われます。

御宮参りの道行きでは、華やかな万灯を先頭に、竹の杖・ソデガラミ<sup>2)</sup>・檜の杖を持つ露払い・悪魔払い（氏子や保存会員の役員）<sup>3)</sup>、笛方、波の花（塩）、洗米、御神酒、猿田彦命、秘伝書（保存会長）、御幣、太刀遣い、ササラ（2名）、獅子（大太夫、女獅子、小太夫）、ササラ（2名）からなる獅子行列に、氏子や一般見学者が続いて社殿に向います。行列は社殿の周囲を3回まわりながら参拝します。見物にこられた方も、ぜひ後についてお参りください。

拝殿前に並ぶたびに、猿太彦命が獅子行列を祓い清めます。1回目は渡り拍子、2回目は揃い、3回目はこの芝の出端「トーヒャニヒャニヒャニ」が始まります。ここから獅子が舞い始め、舞いながら拝殿を巡り、庭場におりてきます。1度庭場の下手（鳥居側）まで戻り、獅子は横1列に、ササラはそれを四方から囲むような定位置に並びます。ここから「御幣懸り」に移行します。

#### ○御幣懸り

3匹の獅子が御幣に懸る舞です。御幣は、大きな小麦のわら苞<sup>づと</sup>に多くの金の御幣を差したきらびやかなものです。平成17年（2005）頃まで、例大祭の後にこの御幣は諏訪神社のお札とともに祭礼関係者の家に配られました。

出端を3笛繰り返すうちに獅子とササラは庭場の中央に進み出て、すぐにチラシとなります。女獅子、小太夫、大太夫の順に御幣に懸かります。先導役として最初に御幣に懸る女獅子と、それに返し笛（節の後半部分の繰り返し）でうなづくように呼応する小太夫・大太夫の動きに始まる冒頭場面は、見る者に静寂な感

---

2) とげの出た鉄叉（てっさ）がついた棒。

3) さいたま民俗文化研究所編 2004、276頁。

動を呼び起こします。女獅子が誘い、小太夫、大太夫が順々に参加して、3匹の動作は発展を続け、複雑な舞になっていきます。最後はテンポを上げて3匹が御幣のまわりを勢いよく回り、大太夫が1拝して、チラシが終わります。

この芝に代表されるように、女獅子が先導役を務める芝は他に花懸りと棹懸りがあります。これらの場合女獅子は母親役を、2匹の雄獅子はその子どもの役を担っていると考えられます。

謡(B) これのごもんへ 来て見れば 畳ついちに 建てた門かな

(A) この宮は ひだのたくみが 建てたげで

くさびひとつで 四方かためる

(A) むさしのに 月のいるべき 山もなし 尾花隠れに ひげや横雲

謡と謡との間の節は、この芝独自のものです。岡崎の節を主題として、次の謡を導き出します。

## (2) 花懸り

4つの花笠を桜に見立て、3匹の獅子が花見にでかけ、その美しさに酔って花を散らさんばかりに楽しく遊ぶ姿を演じます。獅子舞の基本的な所作を中心としており、獅子を始めた者が最初に舞う芝です。あまり長くはありませんが、休みなく舞うため、見た目より体力を使います。ササラの初心者もこの芝から始めます。

4つの花笠の周囲を3回まわった後、女獅子が先導して花の中に分け入ります。花の中に入る時、獅子の足づかいの最も基本となる「ササコ」を踏みます。ササコとは、腰を落とした状態で、足をクロスさせるように2歩踏み、最後の1歩で両足を広げ一層深く腰を落とす型をいいます。この後何か所か出てきますので、注目しててください。ササコにつづいて、「さあ、入るぞ」と、頭を下げバチを獅子の頭上まで振り上げて幕をくぐるような「ヒッカブリ」と呼ばれる所作も見どころです。その他の芝でもササコやヒッカブリは多く使われます。

ササラの中に入ってから、最初は花笠の花を見ます。4つの花笠のうち3つを見終わると、ササラの外に出ます。小太夫・大太夫もこれに続きます。ササラの外に出てからは、右回りに花見をしながら下手に戻ります。

以後2回、花の中に入ります。2回目は花の胴がしっかりしているかを、3回目は根張りがよいかを見ます。3匹の獅子のうちいつも1匹が花の中のように注意しなければなりません。かつてはどの位置からでもササラの中へ入ってよかった



謡(A) 我国は 雨が降るげで 雲が立つ おいとま<sup>●もう</sup>申して いざやともだち

3つ目の謡が終ると、「岡崎」となり終了します。

#### (4) 棹懸り

3匹の獅子が仲良く花見をしながら進んでいくと、行く手に川（川に見立てた竹棹）が現れます。まず女獅子が浅瀬を見つけて先に渡り、それに続こうとする小太夫、大太夫を先導して順に向う岸に渡すという内容の芝です。この芝では3匹の所作の違いに注目してください。同じ動きでも、女獅子は細かく、小太夫は中くらいに、大太夫は大きな振りをします。獅子頭の重さが女獅子、小太夫、大太夫の順に重くなっていることから、こうした振りの違いが出てきます。

3匹の獅子が仲良く山で花見をしている場面から始まります。花に遊びながら山を進むと、庭場の中央に川に見立てた竹棹が下ろされ、行く手をさえぎります。川ではなく倒木との説もあります。最初に女獅子が浅瀬を探し回り、やっと探し当てて向う岸に渡ります。この場面で獅子が棹に懸っていくわけですが、棹に懸かる獅子と棹の持ち手とのかけひきが見ものです。次に女獅子は小太夫を先導して、川を渡します。2匹が前後に重なりながら竹を往復する所作も見どころとなります。小太夫が渡り終えると、女獅子は同じように大太夫を先導し、向う岸に渡します。3匹とも無事渡り終え、3匹で喜びの舞を舞って、チラシが終わります。女獅子役は、ほとんど休みなく長時間にわたって動くため、全芝の中で最もつらい芝となります。

謡(C) 廻れや車 廻れや車 早く廻りて 関にとまるな<sup>●まは</sup>

(B) これのやかたの 殿様は いまがさかりと うちみえて

こがねあしだで つぼをながめる

(A) やつづれが おびれそろへて 行く時は

さてもやかたは 名所なるかな

#### (5) 女獅子隠し

この獅子舞の中で、個人技が最も発揮される芝です。男女の恋の葛藤を描く、繊細かつ優美な舞をお楽しみください。女獅子に対する雄獅子の優しくかつ執拗な誘い。雄獅子の演じ手は本気で女性を誘惑するつもりで舞います。恋人に未練を残しつつ、次第に新たな恋にひかれて誘い出される女獅子の演技は、上級者が演ずると見る者の涙をさそいます。また、チラシの笛は甘美な節を繰り返します。2時間を要し、獅子にとってはもちろんササラにとっても、体力と精神力が要求されます。

「女獅子隠し」はどこの三匹獅子舞にも必ずある芝です。それぞれは内容によりいくつかに分類できますが、下名栗のものは次のようなストーリーになっています。

3匹が花を見ながら楽しく遊んでいると、そのうち小太夫が大太夫に気づかれぬよう女獅子を誘い、自分の隠れ家へと連れ込みます。この芝では女獅子は恋人役です。ここで筵が敷かれ、小太夫と女獅子は寄りそって眠りにつきます。大太夫はそんな事には気がつかずのんきに遊びまわっていますが、やがて2匹がいないことを知り、小太夫の隠れ家を探します。

ようやく小太夫と女獅子が仲良く眠っているところを見つけ、つづいて女獅子を誘い出しにかかります。右前から、正面から、左前から、最後には2匹の間に足を入れ、割って入るようにしながら女獅子を誘惑します。初めは無視する女獅子も、積極的な誘いに次第に心を動かされ、ついには小太夫に未練を残しながらも、少しずつ少しずつ大太夫に誘い出されていきます。少し誘い出されては小太夫のもとへ戻り、また誘い出されては戻ることを繰り返しながら、誘い出される距離がだんだんと遠くなり、ついには未練を断ち切って大太夫のものとなるのです。

誘い出される時のこまやかな女獅子の表情や頭の振り方、小太夫との微妙な距離の変化にご注目ください。女獅子をわがものとした大太夫は、その喜びを大きな舞いで示しながら、小太夫の隠れ家に「ザマを見ろ」とあざけりにいき、女獅子とともに自分の隠れ家にこもります。

ここで小太夫は眠りから覚め、おぼつかない足取りで隠れ家から出てきます。笛の音は急に遅くなり、小太夫の眠そうな様子を実によく演出します。小太夫は大太夫の隠れ家を探し、大太夫による女獅子の誘い出しと同じ所作を行い、女獅子を誘い出すことに成功し、再び隠れ家に連れ込みます。

これに気づいた大太夫は眠りから覚め、女獅子の居所を突き止めます。とうとう大太夫と小太夫は派手な喧嘩を始め、女獅子は花（ササラ）の中に隠れてしまいます。ここを「喧嘩場」といい、女獅子を再度誘う場面から舞い続ける大太夫役にとって非常に苦しい場面です。2匹の雄獅子の喧嘩があまり激しいので、女獅子は花の中から出て仲裁し、再び3匹は仲良く舞い、チラシが終わります。

謡(C) 思ひもかけぬ 朝霧が下りて 所で女獅子が かくされたよな  
(A) 天竺の あひそめ<sup>が</sup>川の はたにこそ しくせ<sup>むす</sup>結びの 神たたれた  
まことしくせの 神ならば 女獅子雄獅子を 結び合わせろ  
(B) これのお堀へ 来て見れば さても見事な こひのやつづれ

## (6) 白刃

悪魔払いの祈願をこめた芝です。2名の太刀遣いが登場し、真剣を使って舞いながら獅子の羽を切る場面のある、当獅子舞で最も有名な芝です。獅子が「刀がほしい、刀がほしい」と太刀遣いにせがみますが、太刀遣いは見せびらかすだけでいっこうに渡してくれません。ようやくのことで獅子は刀をもらえ、大喜びで口にくわえて踊り回ります。

獅子を始めた者は、(2)「花懸り」に始まり、(3)「三拍子」、(4)「棹懸り」、(1)「御宮参り・御幣懸り」、(5)「女獅子隠し」、(6)「白刃」の獅子、「白刃」の太刀まで終わると上がり（摺り<sup>す</sup>上がり）といい、一人前と見なされるようになります。

大太夫・小太夫それぞれに太刀遣い（太刀持ち）がつきます。道行きは、この芝だけは社務所を1まわりして出かけます。氏子役員や保存会員も道行きに参加します。途中で鳥居をくぐる時、太刀遣いは鳥居に飾られた榊の枝を折り取ります。出端では3匹の獅子と榊・半紙を手を持った太刀遣いとが優雅に舞います。

チラシに入ると、女獅子は花に隠れ、その左右の庭場を獅子と太刀遣いとが向い合いながら往復します。最初太刀遣いが手に持つのは、出端と同じく榊と半紙です。それらを手に持ったまま、獅子を囃すように舞います。2番目に持つのは手拭いと半紙で同じ所作を、3番目は手拭いを両手に張って同様の所作をします。

4番目は刀が鞘から抜けるのを防いでいた半紙のつめものをはずし、刀を抜くまねをしながら刀を獅子に見せびらかす「こじり」という所作を行います。ここで次の刀を抜く所作に連続しますので、庭場に塩がまかれます。「こじり」を2往復したところで、それまでつかず離れず舞っていた獅子と太刀遣いが遠く離れ、太刀遣いは「ハー」と言いながら大きく太刀を抜き、りんべいとうしやかいじんれつざいぜん「臨兵闘者皆陣列在前」と九字を切りながら切っ先を低く獅子に向け、そして高く振りかぶります。そのふところへ獅子は飛び込み、太刀遣いは獅子の頭上で太刀を翻しながら往復します。太刀遣いは片手で太刀を自由に扱い、大きく優雅に舞います。太刀を返して使う時、獅子の羽を切り、その羽が舞い落ちます。

5番目は特に名称はついていませんが「見せびらかし」といわれています。太刀遣いは獅子に「ほしいだろう、ほしいだろう」と太刀を頭上高く掲げ、立てたり寝かしたりしながら、獅子を挑発します。これを3往復行います。

6番目は「手・足・切っ払い」で、見せびらかしの変形です。太刀遣いは太刀を自らの腕にあてて1往復、足にあてて1往復、そして最も危険な「切っ払い」で2往復します。「切っ払い」では、上手から下手へ動く際は、接近して舞う獅子との間を太刀をすくい上げて高く見せびらかし、下手から上手へは「追い返し」といい、

獅子を文字通り追い返します。

7番目は「くぐりあい」です。太刀の柄を右手で、左手で切っ先付近に半紙を被せて持ち、獅子の羽にからめながら2往復舞います。この復路も追い返しと呼ばれます。下手・上手ではそれぞれ太刀と獅子とが交差する「半くぐり」・「本くぐり」を1回ずつ行います。その後、太刀遣いが大きく振りかぶり、獅子が飛び込んで、獅子はついに念願の太刀をもらいます。

太刀を得た獅子は、水引の上から役者自らの歯で、半紙を巻いた太刀の抜き身をくわえ、喜びを身体いっぱい表わしながら、大太夫と小太夫とが連れ立って庭場を斜めに横切ります。庭場の下と上の位置で、獅子同士が背中を合せ、伸び上がりながら向き合いうなずき合う「半くぐり」・「本くぐり」の所作は、極めて危険な場面です。2往復した後、下手に待つ太刀遣いに太刀を返すと、花の中から女獅子も現れて、3匹で解放感にひたって晴れ晴れと、また激しく舞います。しばらく3匹で舞うとチラシが終わります。

大太夫・小太夫の役者は太刀を歯でくわえるため、その重みで歯茎から血が出ることもしばしばです。切った獅子の羽は、小分けにして見学者に配られます。これは悪魔払いの意味があり、お札にも入れてあります。獅子が太刀をくわえる時に使った半紙は、役者が自宅に持って帰り、神棚に供えて、無事白刃を演じられたことを報告、感謝します。

謡(A) この獅子は 悪魔をはらふ ししなれば  
あまりくるふて つのらもがすな  
(A) 天から下りし 唐絵の屏風  
てん/からく くーだりし/かーらえ えの/びょうぶ  
ひとへにさらりと 押しひらかいな  
(A) 日は暮れる 道のみさだに 露がゐる  
おいとま 申して いざやともだち

例大祭では岡崎が終わった後、獅子・ササラを中心に庭場に関係者が勢ぞろいし、社殿に向かって千秋楽の謡を歌い、三・三・一の七ツ締を行います。

謡 千秋楽にはたみをのべ 万歳楽には命をのべ  
あいにおいの松風 さつさつのこゑぞたのしむ  
さつさつのこゑぞたのしむ

千秋楽の後、すぐに獅子行列を組み、渡り拍子で社務所に戻り、獅子舞はすべて終了します。

## 4 三匹獅子舞と下名栗の獅子舞

**日本における2系統の獅子舞** 日本では全国津々浦々で獅子舞が見られます。その様式は多岐にわたりますが、大きく分けて伎楽系ぎがくと風流系ふりゆうに大別されます。

伎楽系（舞楽系）の獅子舞は、胴体部分に人が入り、獅子頭を手で操作します。起源は大陸から伝来したと考えられており、西日本を中心として全国的に分布しています。正月に見る獅子舞や神楽での獅子舞をはじめ、ふつう獅子舞というところの系統の獅子舞を指すことが多いようです。

一方、風流系の獅子舞は1人が獅子頭を頭にかぶる1人立ちの獅子舞で、一般に腹にくくりつけられた太鼓を打ちながら舞います。東日本に主に分布しています。東北の一部には7～十数頭で一組の鹿踊（ししおどり）もありますが、もっとも多いのは3匹1組の三匹獅子舞です。

**三匹獅子舞の分布** 三匹獅子舞は、いくつかの例外を除いて、基本的には関東から東北・北海道地方にかけての東日本にだけ広く分布する特徴を持つ民俗芸能です。その数は中断されているものも含めて約1400か所とされています<sup>5)</sup>。とりわけ武蔵国（埼玉県・東京都・神奈川県東部）は獅子舞王国とも言われるほど多くの三匹獅子舞があり、300近くを数えることができます<sup>6)</sup>。武蔵国の農山村では最も一般的な民俗芸能で、秩父・多摩の山間地域にも数多くの獅子舞が伝承されてきました。

**三匹獅子舞の起源** 三匹獅子舞は、中世末期に盂蘭盆うらぼんの行事として全国的に流行した風流踊のバリエーションの1つと考えられています。風流踊とは、仮装をほどこし、太鼓や鉦などの楽器を持って、あるいは身につけて、はやしながら踊る「中踊り」と、そろいの花笠や衣装を身につけ、扇や花枝、スリザサラなどを持ってその周囲を取り巻いて踊る大勢の「側踊り」からなっていました。このうち、「中踊り」が獅子頭をかぶり、太鼓を胸や腹につけた3名1組として固定し、「側踊り」が花笠をかぶりスリザサラすを摺るいでたちのササラスリとなり、四方を固める最小限の4名に縮小され、三匹獅子舞がかたちづくられたといわれています。こうした三匹獅子舞は、江戸幕府の成立当初、江戸を中心とした地域に現れ、東国の幕藩領主が限られた村々に伝えさせたと推定されています。こうしたものをいわば家元として、元禄期（1688-1704）頃までには成立してきた東国の近世村落において、若者組が

---

5) 笹原 2001、216 頁。

6) 笹原 2001、199-209 頁。

担う神事芸能として広範に伝播していったのです<sup>7)</sup>。

**秩父・奥多摩の獅子舞** 秩父・奥多摩地方の獅子は、シシ、すなわちイノシシやカノシシ（ニホンジカ）などを象徴していると思われます<sup>8)</sup>。武蔵国の山つきの地域では、現在スギやヒノキが植林されている山地で広く焼畑が営まれ<sup>9)</sup>、村人は焼畑の作物をめぐる、シシと格闘の毎日を送っていました。シシは、鉄砲が自由に手に入らない近世にはなかなか「駆除」できず、焼畑の出づくり小屋で不寝の番をして追い散らすしか手段はありませんでした。追い散らすにも限度があり、シシが焼畑に出没しないように、シシたちの心を鎮めることも1つの大事な方法と考えたと思われます。シシを型取った姿に身を移し、神に捧げる舞を演じることで、これを達成しようとしたのがその原点ではないでしょうか。

これらの地方では、18世紀に入ると江戸に向けて炭・材木が大量に生産されるようになり、山間村落の生活にも余裕が生まれました<sup>10)</sup>。この余裕は、多様な芸能を村々に成立させました。獅子舞においても、神への祈りや人々の日常生活の様々な局面を折り込み、演出することで、多面的な内容をもつ組曲として発展させていきました。また、村から村へと伝えられていくことで、多くの獅子舞が現在に継承されているわけです。

**下名栗への伝承** 下名栗諏訪神社の獅子舞は、寛文元年（1661）に創始されたとされる多摩郡大丹波村（現東京都奥多摩町大字大丹波）青木神社<sup>11)</sup>から、同郡上成木大沢入村（現青梅市成木七丁目）高水山常福院へ伝えられ、そこから下名栗村へ伝授されたものです。なお、下名栗村にはそれ以前にも獅子舞があったと推定され、隠居獅子とよばれる下あごのない獅子頭が2つ残されています。1つは雨乞いのため、川に流したと言い伝えられています<sup>12)</sup>。

---

7) 山路 1986。なお、多くの三匹獅子舞を観察すれば、ササラスリの人数は4名の場合も多いが、4名に限られるわけではない。

8) 小島 2007 はイノシシだけを三匹獅子舞のシシとするが、分布域がほぼ重なるニホンジカなどもあわせてシシとした方が、理解されやすいであろう。

9) 飯能市名栗村史編集委員会編 2008、163-171 頁など。

10) 飯能市名栗村史編集委員会編 2008、357-412 頁など。

11) 寛文元年7月（寛政7年8月写）「日本獅子舞之来由」（奥多摩町大字大丹波青木神社所蔵文書）。

12) 前掲 1) 故岡部敏氏からの聞き取り。

上成木では、大丹波から師匠を招いて明和 5 年(1768)から稽古を始め<sup>13)</sup>、寛政 7 年 (1795) に獅子舞秘伝書が伝授されています<sup>14)</sup>。下名栗では、現在の獅子頭に文化 5 年 (1808) 造立<sup>15)</sup> とあることから、この年頃より習い始めたと考えられ、天保 14 年 (1843) に秘伝書「日本獅子舞之由来」を与えられています<sup>16)</sup>。どちらも伝習期間に約 30 年をかけているわけです。

**青木神社・高水山の獅子舞** 一番おおもとの大丹波青木神社の獅子舞について、『奥多摩町誌 民俗編<sup>17)</sup>』は、ふいばさみ文挟流の獅子舞として奥多摩町内にある大氷川、棚沢、栃久保、峰、小留浦、原、坂本の獅子舞と同類としています。しかし、「その演舞には多くの相違が見られます<sup>18)</sup>」とも記しています。実際に拝見しますと、節や内容に類似の所がありますが、一般の文挟流が 9 から 12 の演目で、各演目は多くが 30 分程度、長い演目でも 1 時間程度であるのに対し、大丹波では 7 つと少なく、1 つ 1 つが長時間を要します。また各演目の構成と内容も複雑になっています。おそらく大氷川などの文挟流の獅子舞が先ず存在し、それをもとに、大丹波で新たに創作された獅子舞と推定されます。その時期も、創作者もわかりませんが、驚くべき創造力の持主だったことがしのべれます。

大丹波・上成木・下名栗は、親・子・孫の関係にあります。しかし、それぞれを見比べてみますと、節と内容はほとんど同じものの、その所作やテンポはずいぶん違う所があります。青木神社の獅子舞はゆっくりとしたテンポで進められ、大きく、力強く、奥行きのある舞が舞われます。ササラの摺り方が複雑で、これを習得するにはかなりの努力が必要です。上成木の獅子舞は、テンポがよりゆっくりで、1 笛ごとに 1 呼吸おいています。また、所作については、1 つ 1 つの型を非常に大切にしています。伝統を重んじた古式ゆかしい獅子舞として現在に受け継がれており、見る者の心が洗われるような荘厳な舞が披露されています。

**下名栗での振り付け・演出** 下名栗にも当初はこうした獅子舞が伝授されたと推定されます。しかし、その後の継承過程で次のような変化が occurred。

---

13) 明和 5 年 7 月 15 日「当村獅子舞縁起書」(青梅市成木 7 丁目滝島家文書)。

14) 寛政 7 年 9 月「日本獅子舞之由来」(青梅市成木 7 丁目高水山常福院所蔵文書)。

15) 下名栗諏訪神社獅子頭後頭部の記述。

16) 天保 14 年 7 月「日本獅子舞之由来(巻物伝書)」(下名栗諏訪神社文書 371)、同年同月「御獅子一件議定書之事(獅子舞伝書譲渡に付)」(同 372)。

17) 奥多摩町誌編纂委員会編 1985。

18) 奥多摩町誌編纂委員会編 1985、466 頁。

1つ目は、ササコと呼ばれる基本的な足使いの完成です。1、2と左右の足を交差させて踏み、3で腰を深く落すササコを、動作にメリハリが利くように、明快な力強い型に仕上げていきました。

2つ目に、様々な演出が加えられてきました。その第1の条件となったのは、演じる庭場が広いことです。上成木高水山の庭場に比較して、長さにして2倍、面積にしたら4倍はあるでしょう。この広い庭場をできるだけいっぱいにおおうとして、スキップや、裏拍で次の動き出しの調子を整える足使いである「捨て足」などを多用して、大きく、スピード感のある動きを作り出しました。その結果、テンポも次第に早くなってきたと考えられます。

第2の条件は、下名栗の村人の派手好きな気質です。下名栗村は江戸時代から村人の中に階層性が小さく<sup>19)</sup>、様々な面で個の能力を発揮することができました。明治期からの社会教育活動によってこれが益々促進され、明治後期から大正期には炭・材木・養蚕の好景気があり、戦後には材木の好景気があつて<sup>20)</sup>、その気質は開花していきました。これに即した演出は「白刃」の太刀遣いの所作に典型的に表われています。観客に見応えがあるようにと、少しずつ派手さを追求する振り付けが加えられました。

こうして、下名栗の獅子舞は、大丹波で創作された極めて高度な内容に加えて、派手に「狂う」勇壮さをあわせもつものとなったのです。一般に三匹獅子舞には素朴な舞が多い中で、下名栗の獅子舞は現代人にも判りやすいものとして今日に受け継がれ、多くの方々の支持をいただいています。

---

19) 飯能市名栗村史編集委員会編 2008、302-314 頁など。

20) 飯能市名栗村史編集委員会編 2010、411-422 頁。

## 5 獅子舞の継承者とその組織

**江戸時代から昭和戦前期** 江戸時代後期の下名栗村は、炭・材木の生産が主要な生業の村でした。明治になってからは、これに養蚕が加わりました。

獅子舞の譲り渡し書である天保 14 年（1843）「御獅子一件議定書之事<sup>21)</sup>」によれば、当初は上成木大沢入村から「下名栗村若衆」に伝えられています。若衆とは若者組のことです。獅子頭は、その後頭部の記録には文化 5 年（1808）に造立とあります。恐らく獅子頭を新しく作った頃の文化初期に習い始め、30 年以上の伝習期間を経て、天保 14 年に免許皆伝になったと思われます。なお獅子頭は、以後 8 回修繕・塗替えされてきました。天保 12 年（1841）、嘉永 7 年（1854）、安政 5 年（1858）、明治 16 年（1883）、明治 45 年（1912）、戦後になって昭和 31 年（1956）、平成 8 年（1996）、平成 21 年（2009）の 8 回です<sup>22)</sup>。

明治 27 年（1894）からは、「役割帳」あるいは「獅子舞役割帳」という配役記録が現在まで残されています<sup>23)</sup>。これらによれば明治中期には、役者は氏子の中の有志によって担われていたことが知られます。明治・大正・昭和戦前期は、獅子舞役者と呼ばれるだけで明確な組織はありませんでしたが、「役割帳」に記載されることで、各役者は自らの位置を確認していたと思われます。この時代の獅子舞役者は、各家の長男を始めとする相続人でした。獅子舞の技の村外への流出を防ぐためだったと言われています<sup>24)</sup>。職業は炭焼き・杉伐りなどの林業労働に携わる者がほとんどでした<sup>25)</sup>。また同史料などによって、ササラスリは明治期以後、初潮を迎える前の少女によって担われていたことがわかります。ササラスリの衣装は、揃いの日には自分の振り袖で踊ったため、そうした着物を持つ家の子どもでないと担当できない役割でした<sup>26)</sup>。

**戦中・戦後の継承** 獅子舞は戦中・戦後も休むことなく続けられました。戦争の激化した昭和 10 年代末期には、多くの若者や中堅の働き手が徴兵・徴用のため不在

---

21) 下名栗諏訪神社文書 372。

22) 下名栗諏訪神社獅子頭後頭部の記述。

23) 明治 27 年 8 月 1 日「役割帳」（下名栗諏訪神社文書 11）など。

24) 前掲 1) 故岡部敏氏からの聞き取り。

25) 下名栗三区・故大久保市蔵氏（元保存会員）、前掲 1) 故岡部敏氏からの聞き取り。

26) 下名栗四区・故小澤藤江氏からの聞き取り。

となったため、年配の元役者が再び獅子頭をかぶり継続しました<sup>27)</sup>。昭和 20 年 (1945) にも、敗戦 10 日後の例大祭に獅子舞を奉納しています<sup>28)</sup>。

戦後復興が進みその後の昭和 30 年代を中心とする時代は、下名栗地区も製炭・養蚕が衰退するものの、木材景気に沸き、造林を拡大していった時期でした<sup>29)</sup>。

サンフランシスコ講和条約の公布された昭和 27 年 (1952)、8 月の例大祭を期して、獅子舞役者たちは自覚的な組織「下名栗諏訪神社獅子舞保存会」を発足させました。当初の会員は正会員 36 名、準会員 24 名 (ササラ) でした<sup>30)</sup>。諏訪神社の氏子集団の中にありながら、機能的な集団を組織したことになります。以後この保存会が芸の継承と後継者育成に積極的に対応していきました。

この時期の練習は、夜、親方 (師匠) の家に近所の保存会員やササラスリが集まり行われ、例大祭が近づくと諏訪神社の境内で仕上げられました。主な練習日は 8 月 1 日の稽古始めから、七夕 7 日と盆前 12 日の夜、盆休みの 15、16 日は昼稽古、23 日が稽古仕舞いで、24、25 日が祭礼でした。8 月は杉伐りの最盛期であったため、稽古に多くの時間を割くことはできませんでした。獅子の役割は、役者を退いた保存会員が相談して決定していました。

**高度経済成長と継承方法の変化** 昭和 34 年 (1959) には、30 代の保存会員を中心に、例大祭を 8 ミリフィルムに撮影し、多大な時間を使って録音・編集し、記録映画を作製しました。この時代に記録映画を残すという斬新な発想に驚かされます。当時の舞と節、さらには下名栗の景観や観衆の民俗をも後世に伝える貴重な映像となっています。この映画は平成 6 年 (1994) にビデオテープに収録し、さらに 16 年 (2004) には DVD 化し、各家庭で鑑賞できるようにしています。23 年 (2011) には、原盤の 8 ミリフィルムと録音テープを飯能市郷土館に寄託してよりよい保存を依頼し、DVD のデータは全て YouTube へアップロードしました。

高度経済成長期になると、保存会員の仕事も次第に林業労働から通勤型へと変化し、村の多くの若者が村外に仕事や住居を求めていきました。過疎が進んだ時代でした<sup>31)</sup>。この間も保存会は後継者を絶やすことなくその育成をはかるため、後継者不足が深刻化する中で、長男にこだわることなく次・三男も加入できるようにしま

---

27) 昭和 11 年 8 月 (昭和 11、12、14、16 ~ 20 年度役割帳綴) (下名栗諏訪神社文書 198)。

28) 前掲 27) 史料。

29) 飯能市名栗村史編集委員会 2010、411-426 頁。

30) 昭和 52 年 5 月 5 日「推せん書(団体) (文化財表彰につき)」名栗村教育委員会教育長浅見康夫→埼玉県文化財保護協会会長石井義夫 (下名栗五区加藤衛拡家文書)。

31) 飯能市名栗村史編集委員会 2010、426-441、450-464 頁。

した。ササラスリも、子どもの減少にともなって、中学生にも依頼するようになりました。昭和 40 年代以降になると、練習は諏訪神社の社務所に集まって行われるようになりました。

**村の文化財そして県の文化財へ** 昭和 41 年（1966）3 月の名栗小学校竣工式には、上名栗の 2 つの獅子舞とともに、校庭で「白刃」を披露しました。それまで名栗村には 3 つの小学校があり、それぞれの校区にほぼ対応して 3 つの獅子舞がありました。3 つの小学校が 1 つに統合されたのを記念して、3 つの獅子舞が同時に公演されたのです。下名栗の獅子舞にとって記録に残る限りでは境内の外、しかも下名栗の領域を出ての初めての公演でした。これを機に同年 11 月には村内の他の獅子舞と共に名栗村の文化財に指定され、同時に長年獅子舞に貢献した無形文化財の保持者も認定されるようになりました。各獅子舞はそれぞれの氏子のものであると共に、村の文化財として認められたのです。

この頃からは練習日も増え、後継者の育成と技の継承をより積極的に行うようになっていきました。保存会員自身が獅子舞の価値を強く自覚するようになったからです。こうした努力が広く村外からも認知され、昭和 55 年（1980）には「埼玉県文化ともしび賞」の受賞を始め、翌 56 年の有間ダム定礎式には「白刃」を披露し、59 年（1984）には埼玉会館郷土資料室主催の第 108 回展示「さいたまの獅子頭」に獅子頭を出展、60 年（1985）には埼玉県文化財保護協会から「文化財功労者・優良文化財保護団体」として表彰されます。そして同年、埼玉県の無形民俗文化財指定に向けての申請書を提出し、翌 61 年の例大祭にはそのための調査が実施され、埼玉県民俗文化センターの第 47 回民俗芸能公演「獅子舞—太刀—」への出演を経て、62 年（1987）には埼玉県指定の無形民俗文化財となりました。63 年の例大祭は埼玉県民俗文化センターによって録音され、LP レコード『埼玉の民俗音楽 獅子舞シリーズ(3) 下名栗の獅子舞』が製作されました。その際、笛方の長老故村野多重氏指導の下、親笛の塩野貞一氏と獅子の大久保義雄氏によって笛の口唱歌くちしょうが（ジゴト）が編集され、このレコードに添えられました<sup>32)</sup>。

**保存会の組織的運営と後継者の積極的育成** 高度経済成長期以来続いた村の過疎化は平成に入る頃には終わり、人口は増加に転じました。バブル経済期の地価高騰と環境重視の指向が強まる中、手ごろな価格の住宅と豊かな自然環境を求めて、都市住民が移り住むようになったのです。ササラスリにも、こうした住民の子どもたち

---

32) さいたま民俗文化研究所編 2004、208 頁

が参加するようになりました。

平成9年(1997)には、保存会の中に役員会を設け、保存会が組織的に運営できる体制を作りました。増加してきた対外的な問題や後継者育成などに多くの意見を集約し、迅速に対応するためです。

獅子の舞方も、役者同士が相談して三匹の動きをそろえる努力が積み重ねられました。それは獅子の動き出しである出端に端的に表れています。

後継者育成については、笛方は平成10年(1998)から小学高学年以上の氏子ならば男女を問わないことになり、同年には小学6年生が加わり、平成11年(1999)には高校生の女子も参加しました。男子に早くから笛方を経験させて、獅子と笛の後継者育成を目指し、ササラスリを終えた女子にも、保存会への参加の道が開けたわけです。同年には、旧来の衣装から型紙を起こして獅子の衣装を新調しました。

12年(2000)9月に与野市の彩の国さいたま芸術劇場大ホールで開催された「第42回関東ブロック民俗芸能大会」に埼玉県を代表する民俗芸能として秩父屋台囃子とともに出演し、白刃を演じました。13年11月には日本善行会から「自然と文化財愛護」部門で表彰されています。14年には、5月に名栗村で開催された「第53回埼玉県植樹祭」に、また10月にはさいたまスーパーアリーナで開催された彩の国パワーフェスティバル「埼玉県民700万人達成イベント」に出演し、共に白刃を披露しました。同年には獅子の太鼓も新調しました。

**飯能市との合併と獅子舞** 平成の大合併が進められる中、村は再び人口減少に転じました。自主財源も十分に確保できる可能性がないため、名栗村は平成16年(2004)12月31日をもって閉村し、17年1月1日からは飯能市に編入合併しました<sup>33)</sup>。名栗村大字下名栗は飯能市大字下名栗となったわけです。合併を記念して同年1月8日に開催された「飯能市・名栗村合併記念式典および祝賀会兼おめでとう飯能」に出演し、白刃の一部を演じ、好評を博しました。この獅子舞を見たことのない飯能市民にその迫力が大きな驚きを持って迎えられたのです。

また17年度末をもって、民俗芸能についてたいへん特徴ある活動を続けてきた埼玉県立民俗文化センターが県立博物館と統合することとなり、その最後の民俗芸能公演(第128回)「埼玉の民俗芸能」に、埼玉を代表する獅子舞として出演を依頼され、11月に白刃を上演しました。同年の例大祭は、環境省エコツーリズムモデル地区に選定された飯能名栗地区のエコツアーの一企画にも組み込まれ、以後継続して実施されています。

---

33) 飯能市名栗村史編集委員会 2010、502-519頁。

平成 21 年（2009）度には財団法人自治総合センターから「コミュニティ事業助成金」の助成を受け、獅子頭を塗り替え、ササラの花笠と衣装を新調しました。

**後継者育成の成果と支援者の活躍** 平成 10 年（1998）からはじまった笛方育成の結果、男女を問わず親笛を務められる若者が育ち、平成 21 年（2009）・23 年（2011）には、小学生の時から笛を習い覚えた若者が獅子を始めました。さらに 25 年（2013）にも 2 名の新人獅子が誕生しました。後継者育成の当初の目的が、10 年以上を経て実ったこととなります。笛についても、子どもたちを参加させた当初は高校生になるとやめてしまう者も多かったのですが、近年は高校生や大学生、成人になっても継続する者が増えてきました。高校生以上になりやる気がある者には、練習の時から積極的に親笛を任せる指導が功を奏しているように思えます。万灯の花も傷みが激しくなったため、いつも花造りを依頼する方の指導の下、若い保存会員の保護者たちが毎年新しい花を造っています。

平成 22 年（2010）夏は記録的な猛暑が続きました。例大祭となった 8 月 21 日・22 日（土・日）もたいへんな暑さで、熱中症対策に万全を期しました。翌週の 29 日には、奥多摩町大丹波・青木神社獅子舞の創始 350 年祭が開催され、伝承先である青梅市上成木の高水山の獅子舞と下名栗の獅子舞が招待され、「三拍子」を続けて公演しました。約 300 年間にわたって積み上げられてきた 3 つの獅子舞の振り付け・演出の違いが明確に分かり、たいへん興味深い祭礼となりました。

同年の 10 月、当獅子舞を熱心に応援して下さいる 3 名の合作によるウェブサイト『下名栗諏訪神社の獅子舞』（<http://nippara-forest.com/shishimai/>）が開設されました。ハンドルネーム sizuku 氏による平成 18 年（2006）の例大祭からつづくフォト&エッセイ「奥武蔵、獅子舞の夏」を発展させたサイトです。BBS やブログも置かれ、当獅子舞を内側と外側のまなざしで見つめ合う格好の場となっています。このサイトの開設によって保存会員の意欲が高まり、獅子に次々と新人が加わったことも重なって、近年の練習は初めからより熱のこもったものになっています。

**東日本大震災後の新たな動向** 平成 23 年（2011）3 月 11 日、東日本大震災が発生しました。巨大地震と大津波、あわせて原発事故が重なり、大変な年となりました。当保存会では例大祭により高い技量の獅子舞を奉納することで、亡くなられた方々への鎮魂と、被災された地域の復興促進、さらに氏子を始め見学者の安寧を深く祈りました。

平成 25 年（2013）10 月 13 日、埼玉県産業労働部観光課が主催する「第 11 回埼玉 B 級ご当地グルメ王決定戦 in 飯能」に出演を依頼され、「白刃」を上演して好評を博しました。この日のために演技構成を変え、例大祭以降ずっと練習を積んでの

ぞんだものです。26年(2014)6月22日には、飯能市名栗庁舎内に飯能市郷土館「名栗くらしの展示室」がオープンし、飯能市との合併10周年の記念イベントとしても位置づけられたため、3週間ほど練習を重ね、「御幣懸り」を上演しました。

平成26年(2014)の例大祭からは、子どもの減少に伴って男子にもささらすりを依頼することになりました。また、保存会員を夫に持つ妻、子どもたちが笛・ササラをつとめる母親等6名が、まとまって笛を始めました。保存してあった揃いの浴衣の生地が不足するといううれしい結果につながり、現状のデザインから新たに型紙を起こし、20着を染めました。

**獅子舞の現状** 獅子・笛方とも春から定例練習日を設けて月に1度ずつ基本練習をしています。獅子は摺り上がった者やベテランの指導者が模範を見せながら手取り足取り教えます。笛方は、取りまとめ役である親笛など指導者が前に立ち、初心者は後ろについて指を覚えます。笛の節は、押さえる指と音の高低、音の長さを同時に表す指譜で作成し、独習できるようにしています。しかし、基本は指導者の後ろで実際の音を聞きながら会得します。ササラは、獅子・笛方の指導者の数名が先輩の指導者から摺り方を習い、8月1日の稽古始めから子どもたちの指導に当たります。稽古始めからは週2、3回の練習を重ねて、揃い、例大祭にのぞみます。

現在保存会はササラスりを始めた小学2年生から、90代の顧問まで約100名が、年代の切れ目なく所属する組織になっています。一般には中・高校生が地域社会から切り離されていく傾向が強い中で、当保存会ではこの年代をも取り込み、地域文化の継承に深い理解と自負をもつ会員たちが後継者の育成につとめ、また自らの芸を磨いています。

## 【引用参考史料・文献・ウェブサイト】

埼玉県飯能市大字下名栗諏訪神社文書。

埼玉県飯能市大字下名栗5区加藤衛拵家文書。

東京都西多摩郡奥多摩町大字大丹波青木神社所蔵文書。

東京都青梅市成木7丁目高水山常福院所蔵文書。

東京都青梅市成木7丁目滝島家文書。

伊藤 純（2010）「『三匹獅子舞』の儀礼論—行列と舞という二重構造に着目して—」『民俗芸能研究』（48）

奥多摩町誌編纂委員会編（1985）『奥多摩町誌 民俗編』奥多摩町

金子勇太（2006）『文化財創出の過程—埼玉県飯能市名栗地区の3匹獅子舞を事例に—』埼玉大学教養学部文化人類学コース卒業論文

倉林正次（1970）『埼玉県民俗芸能誌』錦正社

小島美子（2007）「三匹シシ舞の起源と芸能化の過程について」『季刊東北学』（12）

埼玉県教育委員会編（1982）『獅子舞の分布と伝承』（埼玉県民俗芸能緊急調査報告書第4集）  
埼玉県教育委員会

さいたま民俗文化研究所編（2004）『名栗の民俗〈上〉』名栗村教育委員会

桜井保秋（1991）『獅子の風—東京西多摩・三匹獅子舞—桜井保秋写真集』桜井保秋

笹原亮二（2001）「三匹獅子舞の分布」『国立民俗学博物館研究報告』26(2)

笹原亮二（2003）『三匹獅子舞の研究』思文閣出版

下名栗諏訪神社獅子舞保存会応援サイト編（2010～）『下名栗諏訪神社の獅子舞』  
<http://nippara-forest.com/shishimai/>

鈴木通大（2008）「『三匹獅子舞』研究の現状と課題」『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』（34）

中島貞夫（2003～）『高水山の獅子舞—その伝来と変容—東京都奥多摩町大丹波、埼玉県飯能市下名栗の獅子舞との比較による私的考察—』

<http://homepage3.nifty.com/takamizusan-sisimai/>

飯能市名栗村史編集委員会編（2008）『名栗の歴史（上）』飯能市教育委員会

飯能市名栗村史編集委員会編（2010）『名栗の歴史（下）』飯能市教育委員会

古野清人（1968）『獅子の民俗—獅子舞と農耕儀礼—』（民俗民芸双書〈32〉）岩崎美術社

峰岸三喜藏（1998）『獅子の詩—日本の三匹獅子舞—峰岸三喜藏写真集』けやき出版

山路興造（1986）「三匹獅子の成立」『民俗芸能研究』（3）

吉田智一（1977）『獅子の平野』（フォークロアの眼5）国書刊行会

1998年8月22日初版

1999年8月21日2版

2000年8月26日3版

2002年8月25日4版

2006年8月27日5版

2011年8月28日6版

2014年8月24日7版

編集・発行

埼玉県飯能市大字下名栗  
下名栗諏訪神社獅子舞保存会

印刷

有限会社萩原印刷

〒368-0001 埼玉県秩父市黒谷 1036

電話 0494-24-4116